

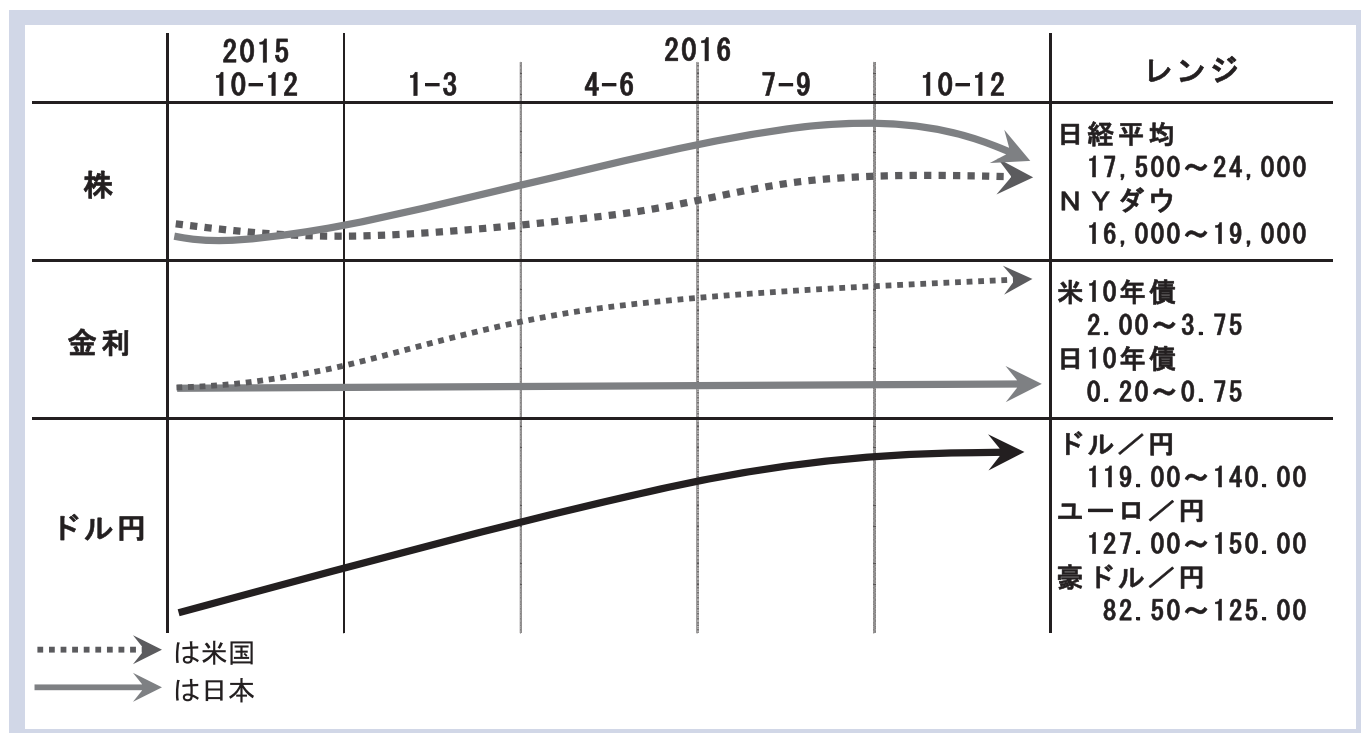
# 各国経済の6ヶ月見通しと向こう1年間の市場予想

(11月6日時点)

## I. 各国経済の6ヶ月見通し

	コメント
① 日本	輸出や個人消費の低迷を主因に景気は足元で足踏みとなっている。もっとも年明け以降には、①海外経済の緩やかな回復に伴う輸出の増加、②所得の増加を背景とした個人消費の持ち直し、③好調な企業収益を背景とした設備投資の増加、などが期待でき、次第に持ち直しに向かうと予想される。
② 米国	米国経済は、16年半ばにかけても緩やかな成長ペースを維持する見込み。雇用・所得の緩やかな増加や、借り入れ環境の改善等を背景とした個人消費の拡大、住宅市場の回復が持続すると予想される。一方、ドル高、世界経済の減速によって純輸出が成長を抑制すると見込まれる。
③ 欧州	ユーロ圏経済は、新興国景気の減速懸念や、米国の早期利上げ観測後退によるユーロ高圧力などが重石となり、輸出の先行き不透明感が強まっている。ただ、原油安による企業や家計負担の軽減、雇用・所得環境改善による内需の持ち直し、金融緩和の効果浸透により、景気が腰折れする事態は回避されると予想する。物価は、原油安による押し下げもあり、向こう数ヶ月はゼロ近傍での低インフレ基調が続く公算が大きい。
④ アジア・新興国	アジア経済は、中国経済を巡る不透明感が残るも底入れの兆しもうかがえ、アジア全体の底離れを促す期待は出ている。各国の政策余地は小さくない一方、米国の利上げ観測に伴う国際金融市場の動揺に揺さぶられやすい状況も予想されるなか、世界的な資金移動の変化が景気の下押し圧力となる可能性には引き続き注意が必要。

## II. 向こう1年間の市場予想イメージとレンジ



(注)記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。